



叔父さんをゆする
生意気甥っ子は
強制女体化
の刑！

Kazuto Ichigaya

Age:17
Sex: male > female

叔父さんをゆする生意気甥っ子は強制女体化の刑！

- 1 高層ホテルで潮吹き五回
- 2 ご自宅にお邪魔します
- 3 夜のお勉強 パート1 ～リビングでフェラチオ～
- 4 夜のお勉強 パート2 ～お風呂でスマタ^{タイム}時間～
- 5 甥っ子のマイルームでパパの声を聞きながら
生ハメ SEX

1 高層ホテルで潮吹き五回

どうしたものかなあ。

高崎は高級ホテルの風呂を満喫して部屋に戻ると、途方に暮れていた。

原因は目の前の青年にある。

市ヶ谷和斗^{かずと}。高校二年生。通ってる高校は都内の有名校でかなり成績は優秀だ。生徒会にも入っていたんじゃないだろうか。

なぜこんなにも詳しいかと言えば、自分が彼の叔父だからだ。

仕事が忙しくてもう十年は会っていない。

子煩悩^{こぼんのう}な義姉がよく彼の写真を送ってくるから知っていた。当の本人は叔父とも知らずに自分をゆすろうとしている。

「ほら。おっさん、出すものさっさと出せよ」

学校の教師が見たら卒倒する光景だ。

彼がやっていることは、ひとり美人局だ。つつもたせ

性転換薬——通称、TS薬が登場してから世界は変わった。男は女に変身することができるようになり、パパ活でも女に変身して。パパがホテルのシャワーから出てきたところをゆする子が登場しはじめた。

善良なおじさんほど狙われやすい。知り合いにも何人かやられた奴がいる。

(まさか和斗くんがやってるとはなあ……)

「さっきのユイちゃんはどこに行ったのかな？」

「あいつは俺の彼女だ」

嘘だ。

なぜなら数分前まで、パパ活と称して、会食を楽しみ、ホテルまで同行してくれた彼女——ユイは和斗と目鼻立ちがそっくりだったからだ。

栗色のやわらかい髪を肩まで伸ばし、少しきつめの目元が胸を強調したミニワンピースと相まって、ツンと澄ました印象になり、実にそそられた。小さな唇がレストランで食事を口

に運ぶたび、どんな風に自分の竿をしゃぶってくれるか想像したくらいだ。しかも食事中、大きな胸がずつとテーブルに乗っかっていた。たぶたぶと揺れる乳房に目が釘付けだったのは言うまでもない。ウェイターもチラチラと彼女の胸を見ていた。

彼は性転換薬を飲んで、高崎がシャワーを浴びている間に元の姿に戻ったのだ。

あの薬は一滴服用するだけで、性別を変えられる画期的な薬だ。変身に要する時間は数十秒と短く、効果が切れるのも一日だ。今ではマンネリしたセックスに新風を吹き込んでくれる薬として有名だった。上質なものと、催淫効果もあるらしい。

高崎はバスローブ一枚の心許ない恰好かっこうだったが、まったく不安はなかった。

ここで自分の正体が叔父だと明かしたら、どんな反応を示すだろう。

鼻で笑うだろうか？ それとも父親譲りの高慢な性格でせせら笑うのだろうか。

彼の父とはそれこそ、ガキのころから比べられて生きてきた。

両親の期待を一身に背負った兄は学業優秀、スポーツ万能。大学卒業後、難なくエリート官僚となり、美人妻と結婚し、一児の父親である。田舎の実家に帰れば、兄はスター扱いだ。

そのひとり息子が今ちょうど自分の目の前にいる。

(あつ、そうだ。いいこと思いついた！)

悪い子にはお仕置きをするのが大人の役目だ。パパ活で自分を騙そうとする生意気な甥っ子の処女を奪ったらどんなにおもしろいだろう。

「おい聞いているのかよ？ おっさん」

兄ご自慢の甥っ子が詰め寄ってくる。肩幅はさすが男子高校生といった様子だが、全体的に線が細い。凄んでみせても、まったく怖くない。

(弱みはこっちが握ってるんだ)

おあつらえ向きにホテルの部屋にはキングサイズのベッドが用意されている。男二人のしかかってもびくともしないだろう。

高崎はあごを手でなでたあと、唐突に甥っ子の手首を掴んだ。バランスを崩した身体をぎゅちりと固めて、ベッドに押し倒した。

「は？ なにして——ッ!？」

巧みに体重を移して暴れる甥っ子の両手を頭上でひとまとめにした。この間、数秒の出来事である。

まさか相手に反撃されると思っていなかった彼はびっくりしていた。

「うん？ どうしたのかな？ 急に静かになったねえ。おじさん、こう見えてパパ活は意外と長くやってね。性転換葉飲んだ男の子が女の子になってゆすつてる話よく聞くんだよ。

君もそうなんじゃないかな？」

ずいっと顔を近づけると、甥っ子から高慢な表情が消えた。

ビンゴ。

「今回が初めてなのかな？ それとも今までにもやってた？」

「おっさんに言う必要があるかよっ！」

おやおや。お仕置きを必要としているらしい。

ぐっと体重をかけると、苦しそうに顔をゆがめた。体格でいえばこちらが大きい。高校二年だ。まだ成人男性の骨格にはたどりついてはいない。自由を縛るなど造作もない。

「今ならまだ間に合うよ。一回目かな？ それとも他のおじさんにもちよつかいをかけたことがあるのかな？」

きれいな顔が苦痛にゆがむ。どうすればこの苦境を脱出することができるか必死に考えて

いる顔だ。突き出す所に突き出せば、こちらは被害者として訴え出られる。兄の話では成績優秀だし、生徒会もやっているなら高校での内申評価もかなり高いはず。何よりもこれから大学受験が控えている。そんななかでこんな事件を起こしたら将来まるつぶれだ。それをこの優秀な甥っ子がおいおい見逃すとも思えない。

「どっちかなあ？」

「っ……。初めて、だ……。よ！」

悔しそうに告白した言葉は、嘘をついているように見えなかった。

「そうか。そうか。それは良かった」

人の良い笑みを浮かべると、甥っ子の表情が一瞬淡い期待に染まる。これでもう許されるんじゃないか。そういう期待だ。

だがそんなものはない。

初犯にしろ再犯にしろ、こういうことをやったら罰を受けなければ意味がない。お仕置きとは折檻してこそ価値があるのだ。

そつと腰を上げようとして、すぐにおろした。フェイクだ。甥っ子の目に期待と恐怖がはいり

まじる。

(いいね。いいねえ。実にそそられる)

ゆつくりと顔を近づけてささやいた。

「おじさんを騙した罰は受けないとなあ」

「何を言つて——！」

「まず悪いことしたらごめんなさい、だらう？」

小さな子どもに言い聞かせる口調で言えば、甥っ子の顔が屈辱くつじよくに染まる。もう高校二年だ。思春期まっさかりの時期にこんな子どもっぽい口調でからかわれたら、屈辱くつじよくとしか思えないだらう。

だがそこがいい。

会社の秘書が今の自分の顔を見たらきつと、本当あげつないですよねー社長、とのたまうに
違いない。

ほっとけ。今は趣味の時間なんだ。

そして自分の大切な趣味の時間を土足で踏みにじった少年には相当の罰を与えるのが大人

の役目というものだ。

甥っ子が悩んでいるあいだに、彼のジーンズのポケットをまさぐった。右側のポケットに硬いものの感触があった。

「——ダメだ、それは……っ！」

ポケットに入っていたものを取り出す。

ちやぶぶん、と小瓶のなかで透明な液体が揺れる。匂いを嗅ぐと、予想通り柑橘系かんきつのさわやかな香りが鼻孔びこうをくすぐった。例の性転換薬だ。しかもかなり上物じょうものだ。安い薬屋で売られているものは大抵青く濁っていて、化学薬品を合成した独特の香りがするが、これはない。混ぜ物一切なしの純度百パーセントといったところか。

どこで手に入れたのやら……。

これみよがしに甥っ子の前で小瓶を揺らすと、口惜しそうに唇をかみしめる。

「これが和斗くんの性転換薬かな。君がこれを飲んだら、おじさんはユイちゃんにもう一度会えるのかな？」

これみよがしに一瞥いちべつすると、ようやく甥いぢへつっ子も自分がどうなるのか分かったらしい。

「い……や……だ。やめ——！」

「はい、あーん」

暴れる口に小瓶の中身を流し込む。

一滴。

二滴。

小瓶のフタをしつかりと締めて、スラックスの尻ポケットにしまうと、甥っ子のシャツを首元までたくしあげ、ジーンズを下着ごとずり下ろした。

「やめ……脱がすんじゃ……な……ッ」

「お。小さなポークビッツ発見」

ぺろん、と高崎の竿と比べたら二回りは小さい竿が飛び出した。強気の状態とは大違いの小ささだ。

甥っ子の両足をすばやく持ち上げて、股をひらかせる。暴れたが、どんどん変化していく身体では無意味だった。

まさに特等席だ。

「——っ、やめろ、見るな……あ！」

叫びと同時に変身は始まった。自分のものと比べたらまだまだ小さいペニスがゆっくりと縮んでいく。同時に肩にかついでいた足も軽くなり、太ももがまるやかな線を帯びていった。

「おお……」

感嘆かんとんの声を上げると、甥っ子が自分の顔を手でふさいだ。そんなことはお構いなしで、高崎はただ目の前の光景に見入った。

「はは。すごいなあ。君のおちんちん、赤ちゃんみたいにちっちゃくなってくよ？」

「う、るさい……！ 黙れえ！」

まだ抵抗する気力は残っているらしい。きつい目でこちらを威圧してくるが、大股びらきさせられた状態では、全く怖くない。甥っ子の身体はどんどんまるみを帯びていき、女らしい柔らかい肉付きに変化していった。

シャツをたくし上げた胸元はどんどんふくらんでいき、豊満ではりのある乳房ができていった。しかも乳首はデカイ態度のわりに、清楚な薄いピンク色でみずみずしい。

「いやあ、すごいすごい。おじさんのおちんちんの五分の一くらいになっちゃったねえ。かわいいなあ」

「っ……………！」

屈辱にゆがむ顔は大いに高崎の溜飲をさげてくれた。あつという間に甥っ子のペニスは形をなくし、あわびを思わせる肉ひだに成り代わった。薄いピンク色の豆粒がのっかっている。クリトリスのお出ました。

すつかりと女の身体に変わったそこへ息をふきかけると、キュツと肉ひだが締まる。彼女の腰がガクガクと震えた。

甥っ子。

いや、これは姪っ子と呼ばばいいのか？

「うぶい反応だねえ。こういうのは、初めて？」
もちろん分かかっていて訊いているのだ。

「う……………るせえ……………クソじじい……………ッ！」

「口の悪い子だなー」

こういう態度もでかくて、自分は何でもできると思っている子に現実を見せてやるのが大好きだ。キツイ目つきの子の女を屈服させるのは大好物だった。しかも今夜は兄ご自慢の息子が相手をしてくれる。となれば、高崎の興奮は頂天に達していた。

「俺の中身は男なんだぞ！　こんな相手にしても……んむ……っ……！！」
小さな唇をしゃぶり尽くす。

くりくりとした目が大きく見開かれる。その瞳に浮かぶ感情をたっぷりと味わい尽くした。

怯え、驚き、嫌悪に軽蔑と、ほんの少しの陶醉感。

ぷっくりとして柔らかい上唇を舌で舐めあげると、おぞましいものでも見る目で睨んでくる。

ほんのりと赤く染まったほっぺを舐めながら、言ってやった。

「悪いけどおじさん、君みたいな世間知らずな男の子を女にして抱くのが好きなんだ。悪いけどあきらめてちょーだい」

「な……、な……っ」

もはや甥っ子は混乱の極みにあった。簡単にゆすれると思った男に押し倒され、しかも自分

が獲物として仕留められる側だと気づかされたのだ。

先ほどまでの高慢さはなりをひそめ、代わりに恐怖が浮かびあがっている。目には大粒の涙をためていて、実にきれいだった。

「男の子の身体じゃ経験できないこと教えてあげるよ。あ。この身体でオナニーとかもう済ませた？ 気持ちよかった？ 何回やったのかなあ？ 教えてよ」

必死にそらそうとする顔を強引に上向かせて、視線を合わせる。

その耳元に吹き込んだ。

「男の子なら興味あるよね。女の子の身体」

なだらかな線を描く腰をなでて、豊満な乳房にようやく触れる。念願のおっぱいだ。待ち合わせた時からずっとさわりたくてたまらなかつた胸が今、高崎の手中にある。

胸を手で隠そうとしたので、甥っ子の腕を引きはがした。

「い……や……だ……」

「こういうことはハッキリさせておかないと。すごいねえ。この胸。おじさんの指がうもれちゃうよ。オナニーの時どんな風にもんでるのかな？」

クリームのようになめらかな肌の感触を指で味わいながら、両手で持ち上げて寄せると大きな谷間ができた。高崎の竿を突っ込んでも亀頭が見えないほど大きい。

その形を心ゆくまで楽しんだ。

手のひらでしぼっては、乳首をつまんで引っ張り上げて、押しつぶす柔らかな乳房は大きく伸びてその形を変える。薄ピンクに色づいた乳首を指の腹でこねくり回すと、彼女の腰が震えた。

感じてる証拠だ。

つまみ上げていた乳首を離すと、乳房が大きく揺れて波打ち、元の形に戻っていく。たぶん、と音が聞こえるほどの揺れ具合だった。

「ほらおじさんに教えてくれないと、ずっとこのままだよ？ 全裸でおうちに帰りたいのかな？」

「っー！」

そんなことはしないだろう、と油断していた瞳とかち合う。

「……………うそ、だよな……………？」

震える問いかけには答えなかった。

代わりにツンと立った乳頭を指の腹でこねくり回したあと、指によだれをたらし、乳輪を濡らした。

「ひっ!!」

唾液の濡れた感触に反応して、腰がはねる。

「おっと。おじさんの指がそんなに良かった?」

「——ち、ちがう!」

「早く言わないともっとはげしくしちゃうぞ」

乳房を五本の指でやわやわともみしだいた。指の力のかけ方を少し変えるだけで彼女の胸はうねり、重力によって元の位置に戻ろうとする。

下品な音を立てて乳首を吸い上げると、舌で乳首の先端をつつき、ほじる。

「や……。それ、やだ……。やめ、……。ひッ、んン……!」

「ん、む……。オナニーしたかどうか言えるまでやめないよ。ほら、早く言わないと、こ
うだ」

じゆるるる。

音を立てて乳首を吸い上げた。

「やああアアア！ 言う、言うから！ 言います……！ あ……試しに飲んだ時に一回だけ……」

「二回なわけないだろ？」

男子高校生の性欲がその程度で収まるわけがない。吸い上げた乳首を舌でしゃぶっては、歯で軽く噛み、しまいには乳房が浮き上がるほど強く吸ってやった。

「ンん！ あ、あ、あ、ふう……。ン……。……ツツ！ ——さ、三回……」

「三回だア？」

すごんだ声を出せば、彼女の薄い腹が浮いた。感じているのか、怯えているのか。高崎にはどちらでも構わない。むしろ怯えが快感につながるのなら、それはそれで結構なことだ。

「五、五回……。や……。つて……。ひんっ！」

「へえ。どんな風に？」

涙に濡れた目が大きく見開かれる。よもや聞かれるとは思ってなかったのだろう。

甘いねえ。もつといじめたくなっちゃうよ。

「やだ。もお、むり……い」

「むりなはずないだろ？ 市ヶ谷和斗くん」

本名を呼んでやると、彼女の瞳が大きく潤うるんだ。

「なんで、名前……知って……」

「それよりどんな風にオナってたかおじさんに教えてよ。おっぱい？ それともクリいじめられる方が好き？」

歯を食いしばって必死に耐えている。その表情を眺めているだけで、下半身に熱が集まってくる。こんな質問などされた事がないのだろう。どっちが好きなのか、身体の反応を見てやろうと、おっぱいをもみつぶしては搾しぼりあげる。

「ひっ……やだ、それ……やめ、ろ……」

「素直じゃない和斗くんには、お仕置き追加と」

本名を呼んでやると、悔しげに眉根を寄せた。その顔が高崎の熱を煽るとも知らずに。

乳首を吸い上げた時もあったが、胸の感度がかなり良い。乳首がツンと上向いているのがその証拠だ。

(さーて、次は下のお口に聞いてみますか)

薄い肉付きの腹をなでると、ピクピクと振動する。

彼女の両足を担ぎ上げて、待ちに待った肉ひだを指でひらく。

くばあ、と音がするほど秘部は愛液で濡れていた。胸をもまれて感じたのだろう。透明な液体が肉ひだからしたたたって、真っ白なシーツに染みを作っている。おそらく大人の男の指にいじられるなど初めての経験だろう。尻穴がキュツと緊張していた。

「女の子の匂いにするなあ」

クンクンと犬のように鼻をひくつかせると、汗とむれた体臭でメスの匂いがした。かすかにおしっここの匂いがした。

「おじさんに押し倒されて、怖くてちびっちゃったかな？　かわいいねえ」

「ちが……そんな、訳あるか……っ！」

大股開きをさせられているというのに、まだ口答えしてくる。その声を突き崩してやろうと、

高崎は肉ひだの上についたクリトリスをしゃぶった。その反応は効果靨面こうかてきめんだった。

「や……、だめ……だめ……ええっツツ!!」

吐息まじりの嬌声は高崎の竿を否応なく刺激した。ぐつぐつと煮えたぎったマグマのように竿のなかで熱が入りまじる。と同時に彼女の秘部からはとめどなく愛液がこぼれ出した。あごに垂れてヌルつく感触に笑みを深める。指の腹でやさしく肉ひだをめくり返すと、これも感じるのか腰が浮き上がろうとする。ヌルついた愛液で肌をなぞられるのが気持ちいいのか、あるいはクリトリスを吸われるのが気持ちいいのか。きつと両方なのだろう。舌を使つて小さな豆粒を持ち上げては肉ひだをほじってやると、内ももが何度けいれんも痙攣を繰り返した。「ン。ちよつと和斗くんには刺激が強すぎたかなー?」

「ひい……ッ……ン……ん。……もお、……ムリ」

初めてしたオナニーよりも数倍刺激的な洗礼を受けて、息が上がっていた。この程度で満足してもらっては困る。まだやることは山ほどあるのだから。

息もたえだえな彼女を尻目に、愛液をすすった。

ジュールッ!

下品な音に、嘘だろ……、と呆然とする声が聞こえた。

口のなかで何度も愛液を舌に転がして、そのねばつきやトロつき具合を味わった。ごくりと音をたてて飲み込めば、信じられないものを見る目つきで彼女がこちらを見ていた。

「おいしかったよ。和斗くんのおその味」

理解できないとばかりに、彼女が首を振る。その姿にはもはや年上の大人をからかってやるという驕慢きょうまんさは抜け落ち、恐怖のどん底に突き落とされた顔を浮かべている。

これからこの怯えた顔がどんな風に乱れてくれるか楽しみで仕方ない。

「やっぱりクリちゃんいじめられるのが好きなんだねえ」

「ち、違う。……違う、ちがう、ちがう……っ!」

何度も否定する姿が実に可愛らしかった。

「またまたあ。おじさん、クンニも手マンもうまいから、何回でもイかせてあげるよ」

「手マン……っ!」

どうやら全く知らないようだ。無知な態度がかわいくて仕方がない。

「今から実践してやるよ」

ぞんざいな物言いをすれば、キュツと尻が締まる。

(ちよつとMっ気あるなあ。こりゃ楽しめそうだわ)

高崎は肉ひだをめいっばい広げてできた穴に舌を差し込んだ。肉厚な舌で存分に内壁をなぞっては、愛液をすすった。親指の腹でクリトリスも一緒にいじってやると、気持ちいい悲鳴が上がった。

「や、や……あ、あ、あ、ああああああアツ！」
ふしゅ。

愛液があふれ出し、膣が収縮する。

まずは一回。

かなり性欲がたまつてそうだし、まずは五回イかせてみよう。若いからいけるだろう。

こぼれた愛液を残さず飲み干す。

膣内にあるプチプチとした感触をベロでなめあげると、気持ちよさそうに内壁がうねる。舌で押しつぶすには長さが足りないため、引き抜いた。

「あ……」

物足りなさそうな声が頭上から聞こえたので、顔を上げて目を合わせる。とっさに顔をそらす、もう遅い。

「おじさんの舌気持ち良かったんだねえ。だいじよぶだよ。指はもつとうまいから」

目を細めながら、舌の代わりに人さし指をゆっくりと差し込んだ。内壁を傷つけないよう丁寧に指の付け根まで入れ込むと、クルクルと指を回した。

「ひい……ンン……っ……ッ！」

じゅぽじゅぽと空気と愛液が絡みあつて、かわいらしい音を立てる。人さし指の腹で膣内のプチプチを押してやると、またイった。

これで二回目。

女の快楽に慣れていない身体は、あつけないほど簡単に陥落する。うるみきつた膣ナカに今度は一番太い中指を挿入した。ほんの少し右にそつた中指は今まで何人もの女をイかせてきた。

第二関節から右にそれた中指がちょうどイイところに当たるらしい。

「じゃあ、本番いきまーす」

アダルトビデオの撮影みたいなセリフを言えば、彼女が怯えた表情でこちらを見る。それをせせら笑いながら、今度は本格的に人さし指と中指の二本で激しく出し入れた。

ぱっちゅ、ぱっちゅ。

かきませられた愛液が泡をたてながらこぼれてくる。

パイプも入れたことのないだろう秘部は大きくうねって、必死に責め苦に耐え抜こうとしていた。いっせけなげな程の動きだ。しかしこのスピードをゆるめる気など毛頭ない。

「和斗くんの弱いところはどこかな？」

やわらかい内壁を傷つけないよう注意しながら、指の付け根まで奥に押し込む。そうして内壁で指を開いて、感じるポイントを探した。突然のスピードダウンに膣が収縮して、もう一回と訴えてくる。その呼びかけに応えてやることにした。すなわち膣内で指を広げたまま、上下左右に動かしたのである。

「あ……あ……。指、まわすの、だめ……。ひろがっちゃ……。んんッ!!」

「おうおう。三回目までイっちゃったよ。すごいねえ。こういう才能があったのかな？」

じわりと涙をこぼして懸命に首を振るが、そんなものは高崎の竿を昂ぶらせるだけだ。めい

つぱい広げた内壁から指を引き抜こうとすると、彼女がほっとした顔を浮かべる。

(ばかめ。こういう時に油断するから、つめが甘くなるんだ)

指を抜きかけた瞬間、手首を返してグリグリと入り口の浅いポイントを人さし指で押しつぶした。

「やあ……あああ——アア、アア、アア、——！　つ、ツ、ツ！！！！」

声にならない嬌声が高級ホテルのベッドルームに響きわたる。と同時に、くぶん！　と愛液が強く噴き出す。

こりゃあ、潮吹きまでいけるかもしれん。

ぴゅっぴゅっとなび出した愛液が高崎の袖やシーツを濡らした。大洪水とまではいかないが、おもらしをしたような状態だ。

そつと薬指を足した。

合計三本。

愛液であふれた秘部は、簡単に三本の指を迎え入れた。高崎の指はかなり太い。三本まとめれば、細身のバイブくらいの太さにはなる。それをすんなり受け入れるのだから、かなり緩

んできています。

竿を入れてもいい頃合いだ。

彼女の痴態を見せつけられて、ストラックスの中の竿はパンパンにふくらんでいる。

(この五回目を終えたら——な)

一つにまとめていた指をゆつくりと内側で広げると、肉芽のくぼみにたまっていた愛液をかきだした。

「ひう——!!」

快楽の波にうたれて、内ももがひくついている。ぱちん、と片手で内ももを叩いてやると、可愛らしい悲鳴が洩れる。

(ケツを叩いても感じるタイプかな?)

ますますいじめたくなる。

「それじゃあ……激しくやるよ」

二本の指を付け根まで押し込むと同時に素早く引き抜いて、もう一度うがつ。本番さながらの動きで出し入れしたまま、あいた片手でクリトリスをつまんでひっぱる。



「ひゃ……あッ……、だめえ！」

彼女の顔を注意深く観察しながら、痛みとは異なる快樂を引きずり出していく。親指でクリをこすっては、こねくり回し、指の腹でつぶす。その度に肉芽がひくつき二本の指に絡みついて、もつと激しくとおねだりする。

くふくふ、と空気を孕んだ音が高崎の荒い息づかいとともに、広い部屋に漂う。四回もイかせれば彼女の弱点も分かってくる。入り口の浅いところ、密集した肉芽を指の腹で容赦なく押しつぶす。

「ほら、イっちゃまえ」

あざけりを含んだ言葉とともに、太さの異なる指でグリグリと彼女の泣きどころを押した。「——うウ、ふ……ッ……ンん！ あ……あ……だめ……だめ……エエエええ——ッ！！」
ぶつつしやあああ。

勢いよく透明な潮が彼女の恥部から吹き出す。しゃーしゃーとおもらしに似た音を立てて、シートを汚し、高崎のワイシャツも汚した。顔にかかった潮を舌でなめとり、ベッドの上で身悶える彼女の姿を目に焼き付ける。

何秒続いただろう。

腕時計で計つてやると、たつぷり十秒は噴き出していた。ようやくすべて出し終えて、ひくつく足をなんとか閉じた彼女の身体はこまかく震えていた。まだ快感の奔流が体内を駆け巡っているのだ。身を引くたびに、びくんびくんと全身を震えさせている。

そつとベッドの上で自分の身体を抱え込もうとするが、まだ終わりにゃない。

「女の子の身体もイイもんだらう。次はおじさんを満足させてくれるかな」

シャツを脱ぎ、スラックスのベルトを抜いた。チャックを下ろして、我慢汁で濡れたパンツから、完全に勃起した竿を取り出す。屹立とした竿は、さっきの三本の指より一回りも二回りも大きい。睾丸は今にも精液をどんどん立ちのぼらせていて、早く出したくてたまらない。

凶悪な太さの竿にはいくつも筋が浮き上がり、地肌よりも濃い色合いの亀頭が雄くささを際立たせていた。慣れた仕草で持ち上げた竿を見せつける。

「——！ ひっ……い、やだ……そんな太いの……むり……い」

あとずさるが、背後は壁だ。それ以上下がろうにも逃げ場はない。怯えた目が左右を見渡して、逃亡先を見つけようとすが、もう遅い。

騙した代償は支払ってもらおう。

ほっそりとした手を引き寄せて、優しい声でささやいた。

「なあにだいじょうぶ。安心して。孕んだりしないから。ちよつとナカ出しさせてくれるだけでもいいから、さ」

すつかり怯えきつた彼女の頬をやさしくなでて、ほほえんだ。そのままもう一度、ベッドに押し倒した。

今度はぬめつた恥部に熱くたくましい竿をこすりつけながら。

自分のナカに男のモノが入ろうとしている。

冗談じゃない。なんでこんなことになったんだ！　ちよつと勉強の息抜きに遊ぼうとしただけだ。悪友の省吾が放課後にこんな方法で稼いでいる奴がいるらしいと言って、例の薬を渡してきた。

製薬会社に勤めている父親のコネだろう。夏休みに入り、受験勉強でストレスがたまりきっていた時、薬のことを思い出した。毎日勉強つめで疲れた身体をほぐすため、気分転換にと実行した。

こんな事になるなんて思わなかった！

だが今さら何を言っても状況は変わらない。父と変わらない年齢の男が、強制的に性転換させられた身体にのしかかっている。

なんだよ。あの太さは。

あんなにデカイチンポぶら下げてる奴なんて、学校にいない。

しかもこの男は武道を学んでいるのか、逃げようにも巧みに体重たくをかけてくる。奴の手で文字通り五回もイカされた身体は、快楽にほだされきっている。

あんな——！ 女の股に顔をうずめて、あんなところを舐める人間がこの世にいるか。嘘だろ。漫画で見たことあるけど、だからってやる奴がいるかよ。

くそ。変態ジジイ！

心の中で悪態がどんどん溢れてくる。口には出さない。言えばどうなるか分かったもんじゃ

ない。

なにせ、この男は自分の本名を知っている。

市ヶ谷和斗。

一言一句違わない。正真正銘、自分の本名だ。名乗った記憶は一度もない。それなのにこいつは知っている。もしも今回の出来事が高校にバレたら人生おしまいだ。何よりも父に知られることが恐ろしい。子どもの頃から厳しい人で、ほめられた事は数回しかない。それも小さい頃だけだ。最近は帰りも遅く、めったに顔を合わせることもなかったが、あの父に知られたら、それこそタダではすまない。

大学進学だって危うくなる。

できうるものなら数時間前の自分をぶち殺したかった。

もう残されている方法は、高崎が満足するまでつきあうことだ。強制的に女の身体にさせられた状態で、この変態オヤジとセックスする。彼を満足させられれば、次の出方も考えられる。

和斗はぎゅっと目をかたくつむった。

(早く終われ。終われ。終われ)

そう思うのに、高崎は一向に次の行動に出ない。さっきの性急さはどこに消えたのか。薄目をひらくと、満面のにやけ面を浮かべた高崎と目が合った。

「じゃあ、始めようか」

(こいつ……!)

いちいち目をひらくのを待っていたのだ。どんな反応を示すのか、つぶさに観察するつもりでいる。

最低だ。人間のクズだ。

しとどに濡れた太ももを閉じようとするが、強引に開かされた。まるで赤ちゃんがおしめを替える時のポーズを取らされて屈辱的だった。羞恥心がとめどなく溢れてくる。

屹立とした肉棒がゆっくりと自分の恥部に近づいてくる。

「まずは形を覚えてもらわないとな」

「ひっ……!」

血の通った熱い肉棒が薄い茂みにくつつけられた。よだれを垂らすかのように我慢汁の垂

がまんじる

れた亀頭が栗色の茂みを濡らしていく。

一回、二回。

数えるのもいまわしい肉棒が自分の股間にまとわりつく。薄い陰毛から垂れた我慢汁が、つと肉ひだを横切っていく。ようやくと離れたかと思えば、高崎のせせら笑う声が聞こえた。

「ほくら。キスしますよ」

ちゅっちゅ。

クリトリスにコンドームもつけていない亀頭が吸い付く。

「やめ……。ふぜけ……。ンな……。……。……。ああっ！」

唇で吸われるのとは異なる感触に、尻を揺らして逃げようと身をよじるが、がっちりと高崎の手で固定されて動かせない。

「和斗くんの下のお口、おじさんの大好きって言うてるよ。可愛いねえ」

「んん……。っ……。だまれ、この……。ヘンタイ……。ッ」

「お。お。そういう口答えする子にはこうだ」

ぶちゅん！

亀頭がクリトリスに強く押しつけられる。全身に小さな電流が走った。気持ちいいと訴えかけてくる。拒否する心とは裏腹に、自分の身体は高崎の行動に悦んでいた。もつとこの喜びを感じたい。味わい尽くしたいと叫んでいる。

まるで自分の身体が心だけ置き去りにして、女になってしまったかのようだ。この男のやり口に早く墮落しろと叫ぶ。

いやいや、と駄々をこねるように頭を振るが、押しつけられた亀頭は全くどく気配はない。そのままクリトリスに我慢汁をたっぷりとかけられて、小さな豆を吸い尽くそうとする。

「ああつ……んッ……！　クッ……やだ……ア」

「お。もつとほしいのかな？　和斗くんは欲ばりなタイプの子か。そうか。そうか。この程度じゃ我慢できないか」

「ちが——！　ひ……ッ……い……んンンッ！」
じゅぶん。

とうとう入ってきた。

男の肉棒が自分の体内をみちみちと押し広げていく。さきほどの指が可愛らしく思えるほ

ど、それは太くたくましかった。よく熱された肉棒が肉ひだをわけいり、体内を蹂躪じゅうりんしている。

「やだ……いや……あ……ヤ……、抜け……っ！ 今すぐ抜けえ！」

言葉はむなしく、体内に入り込んだ肉棒は抜かれなかった。膣内の隆起したつぶつぶをじつくりと味わうように楽しんで、肉ひだに我慢汁をたらしながら、どんどん奥を目指す。

「和斗くんの処女膜はどこかなあ？ ここかな？」

最奥まで突き上げられる、と恐怖に身を竦ませると、高崎は肉棒を引いた。

(助かった……のか……?)

ほっとしたのも束の間、浅い入り口を突き上げられた。先ほど高崎の指で否応なく感じさせられたポイントだ。うがたれた肉芽が女の悦びに打ち震えた。

(違う。俺は女じゃない……！ 薬で一時的に女になっただけで、こいつの女になった訳じゃ……！)

必死に否定するも、思考は快樂の波にどンドン打ち消されていく。グリグリと浅い肉芽を何度も押され、あつという間に高崎のハメかたを覚えていく。

「お。ゆるんだねえ。気持ちイイのが分かるんだ。さすがは優等生」

自分の体内を実況されて、羞恥に打ちのめされた。聞きたくないと耳をふさぐが、そうすると高崎の腰の動きがダイレクトに伝わってくる。どんな風にピストンを打っているのか丸わかりで、余計に身体の熱を煽る。

「じゃあ、おじさんの本気、見せてあげよ」

浅いところに留まっていた亀頭が竿ごと入り込んでくる。ごりごりと肉芽を押しつぶし、子宮に迫る。きつく締まった肉ひだをかきわけられて、息を飲む。次の瞬間、ぱちゅん、と何かが破られる感触がした。

まさか……。

高崎が人のわるい笑みをうかべた。

「和斗くんの処女もらっちゃった。ごちそうさま」

「いや……！ いやあ……ッ！」

「ほうら。和斗くんとおじさんの赤い糸だよ。きれいだねー」

ひろげられた指の間を処女を破った血の糸がつたう。